

# 東方四鬼館 ～青鬼の館が幻想入り～

ガルナイド.

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦闘に加え、ギャグとシリアスを少々。

私の連載小説「東方記憶帳」の執筆が滞った時に書く小説です。

故に投稿スピードは遅いかもかもしれません。

コンガラとは、旧作のキャラです。

彼女を知らなくても読者様が理解できる様に努めたいと思います。

# 目次

一話 「……開かない？」	1
二話 背を見せるは鬼の恥	6

一話 「……開かない？」

「何とも言えない所だねえ。本当に出るのかい？ ここは」

突如魔法の森に出現した謎の館。

ひびが入り所々黒ずんだ壁、伸び放題の雑草や蔦つた。生活感の欠片も無いその館は見るだけで人を不安にさせる。その不気味さ故か、様々な噂が流れていた。

夜な夜な子供の泣き声が聞こえる。とんでもない化け物が出る。はたまた、極上の酒や宝が眠っているなんて噂もあった。

一連の噂話に興味を惹かれて度胸を試す輩や、宝を狙う賊などが館へと足を踏み入れた。しかし、その中の誰もが行方知れずとなった為、館の噂は一層広まっていた。人妖はその館を、神隠しの館と呼んだ。

「もし何も無かったら、さっさと帰るわよ」

化け物がある。極上の酒がある。不確かな噂を聞きつけて、ここへ足を踏み入れる者達がいた。

彼女らは、山の四天王と呼ばれており、山の妖怪達に畏れられている。三鬼と一仏。この四人が揃っているという状況の存在感やオーラたるや、それは凄まじい物であり、その場にいるだけでも威厳や恐怖を感じさせる程であった。

一人は子鬼。子供のような容姿だが、角が二本生えているれつきとした鬼だ。その容姿の反面堂々としており、酒の入った瓢箪ひょうたんを左腰に結び、顔を赤らめていた。名を伊吹萃香いぶきすいかと言った。

一人は大柄な女性の鬼。額には大きな角が一つあり、大きな盃を背に縄で括り付けている。その見た目にすら力があり、また、厳然としている。この館に入るよう、皆を誘い集めたのは彼女だった。名を星熊勇儀ほしくまゆうぎと言った。

一人はいかにも女性的な鬼。ピンク色の特徴的な髪の上には二つのシニヨンが乗っていた。姿には包容力が滲みだしているが、四人の中でこの企画に一番乗り気でなく、少々浮いていた。名を茨木華扇いばらぎかせんと言った。

一人は和装束の仏。額には鬼のような大きな角が生えていた。片手に鞘さやに収められた刀を持ち、武士のように凜と構えている。名をコンガラと言った。

並大抵の者程度では、近づく事もはばかられる集団。彼女らの事を知っている者であればなおさらだろう。

「……………」

「おいどうしたよ、コンガラ」

黙って身動き一つしないコンガラに、勇儀が声をかけた。

「うむ……………ここは何かいるぞ」

「おお！ やっぱりか。噂は間違いじゃないようだね。どの位のがいるんだい？」

厳かに告げられたコンガラの一言に、勇儀が食いついた。その姿は目前の楽しみを待つ子供のようだ。

しかし、すぐに帰りたいたいと思っていた華扇にとって、この知らせは嬉しい物ではない。勇儀は、皆でこの状況を楽しもうという気が強いのだろう。なるべく引き止められないように帰らなければならぬ。

「正確な数や正体までは分からない。ただ、複数いるのは確かだ」

「へえ。さしずめ、化けもんの巣つてとこだね」

萃香が実に楽しそうに呟いた。彼女もこの状況を楽しむ一人だった。

「さあて。探すべくは宝の酒と神隠しの化け物だ。早速行こうじゃ……………華扇、何してる」

勇儀が訝いぶかしげに華扇へ尋ねる。当の華扇は、先程四人が入ってきた外へつながる扉の前で怪しい行動をしていた。

「なあ華扇。まさか帰ろうつてのかい？ 折角この四人で来たんだ。最後まで付き合ってくれりゃ——」

「この扉、開かないんだけど」

全員がその事態を理解したのは少し経ってからだった。神隠しの館。そう呼ばれる由来の一つに、この現象が関わっているのだろうか。開かない？ まさか。すでに自身でその扉の固さを確認した華扇以外の三人は、そのように思った。しかし、開かないのは事実。

「冗談じゃ………ないんだろうね。あんたの言う事だ。力は？」  
「全力。ビクともしないわ」

勇儀は考え込んだ。その眉間にはしわが寄っている。

「取っ手は回したか？」

「もちろんよ」

「……押して開けるのかもしれないぞ？」

「そんなに馬鹿じゃない」

「自動で開く扉かもしれない」

「何よそれ」

「河童が話しているのを偶然聞いた。外の世界にあるらしい」

「なにせよ自動で開かないんだから。それは無いわね」

「合言葉を唱えよ」

「は？」

「分かった。私に貸せ」

にわかには信じがたい事だった。華扇の事を疑っている訳では無い。むしろ少しからかっていた位だ。しかし、勇儀は自分で確かめないと気が済まず、扉に近づいていった。

しかし、勇儀は止まった。その道を、萃香が遮っていたのだ。

「意味無いよ勇儀。華扇がやっても駄目なんだ。きつと結界やら術式やらが掛かっているんだろうね。扉に使う力を今後に取って置きなよ。化け物が出るんだろう？ しかも、私らは出られない。だから神隠しの館って訳だ。面倒な事が嫌いで、勇儀の企画したこの暇つぶしから抜け出そうとした華扇がそれを証明してくれた」

先程までとは打って変わって、空気が重くなった。館を舐めてかかっていたのかもしれない。これでは度胸試しでここへ入り、そして消えていった輩と同類だ。しかし、後悔しては負けだという考えが華扇以外の三人にはあった。

華扇は元から無関心であったため、そのような考えは無かった。どちらかと言うと、面倒なことに巻き込まれた死にたい、的な感じで落ち込んでいた。それに、一つの希望を見つけていたのだ。

「はあ……ちよつとこれを見なさい」

彼女のが指さしたのは扉だった。力づくで開ける事ができないのは分かりきっている。しかし、その扉には、やはり光明があった。

「……………鍵穴か」

コンガラが呟いた。

鍵が無ければ絶対に開かない扉。やる事は分かりきっていた。

「おお、そうかい。私らに鍵を見つけろってんだね。おもしろいじゃん。勇儀、やる事が増えたよ」

「よし分かった。目的は鍵と酒と化け物探しだ！」

勇儀が皆に円陣を組むよう促す。「ええ……」と華扇が嫌そうに声を漏らす。腕を引っ張って無理やり陣に組み込んだ。

「音頭はコンガラの役だろう」

「ああ、分かっている……」

静けさが漂った。天災の前は不思議と静かになる。まるでそのようだ。

「——誰も帰れぬ怪奇の館。我ら四天王の名と儀に掛けて。音頭の威勢の酔いある内に。未踏の出口へいざ向かわん！」

「つつしやあアア！」

「おおうー！」

「……………おー」

いつも通りの拙い音頭。しかし、彼女らはこれ以上の物は無いと感じていた。

重かった空気など初めから無かったかのようだ。明るい、熱い空気。これだから四人での集まりはやめられないのだ。これが終われば、見つけた酒で宴会だろう。華扇ですらも、それを密かに心待ちしているのだった。

状況に憂えて立ち止まる事など、彼女らには到底あり得ない事だ。

「早速行こうか」

館の搜索を始めようとしたその時——

「……………今のは何だ？」

——何かの割れる音がした。



## 二話 背を見せるは鬼の恥

別の部屋で何かが割れた。

入口が開かない時点ですでに、ここが怪奇の館だという事は分かっていた。それでも、突如として起こる謎の現象は気に掛けてしまう。この館なりの歓迎とでもいうのだろうか。

しばらく、無言の時間が進む。

「よし、何が割れたのか確かめに行こうじゃないか」

沈黙を破り、勇儀が嬉々として言った。一時の衝撃こそあったものの、四人はあまり応えている様子が無かった。

「……ええ、行くならまとまって行った方が良いわね」

勇儀の積極性のある提案に答えたのは、意外にも華扇だった。

「ほう。華扇、いつになく乗り気だね。酒と好奇心は常に人を動かさうるって？ それとも、内心では楽しんでたりしてるのかい？」

笑みを浮かべながら、萃香がからかうように脇腹を小突く。ふざける際のそれにしては、鈍い音が強すぎるほどだった。しかし、華扇は真顔で萃香を軽く睨みつけるだけ。痛手ではないようだ。

力、硬さ、技、心。鬼は非常に戦闘に長けた能力を持っている。人間が受ければ必殺の一撃でも、鬼にとってはお遊び程度なのだ。

種族の差とは、とても大きな物だ。ましてや、鬼の中でも最高の実力を持つ萃香、勇儀、華扇の三人である。その地位は平の鬼、天狗、その頭を否が応にも下げさせる。鬼でなくとも彼女らに肩を並べるコンガラの立ち位置も、それに相応する。

「まったく……楽しんでなんかないってば。どうせ行く当てもないんだし、もしかしたら誰かいるかもしれないでしょう」

「そうだな、華扇殿がいるかもしれないね。先程から姿が見当たらぬ故」

その言葉を聞いて、華扇が戸惑うようなそぶりを見せる。自分にも異変がない事を確認し、彼女は言った。

「コンガラ。真顔でそういう事言われると怖いよ。私が見んなから見えていないって言う風に錯覚して——」

「華扇殿、大丈夫か？ 何をおかしな事を言っている」  
「ちよつと」

「さてと、華扇がこれ以上おかしくなる前に脱出した方が良いのかな。  
先頭は華扇でいいね？ 行こうか」

「早速化け物が出てくれるといいんだけどねえ。腕が鳴る。先頭は華扇か」

「華扇殿、早く行こう」

「え、え？ なんでそうなるのよ」

「言い出しつぺは華扇。だから、先頭」

「……確かめようって言ったのは勇儀よ。先頭は勇儀ね」

「ああ、そういえばそうだったね。むう……じゃあ先頭は勇儀だ」

萃香はいささか不服そうに言った。あくまでも自分の言った理屈であつたので、彼女にはきつぱり折れるという判断しかできなかった。強者とは皆、何かが違う。普通の者と考え方が根本的にずれている者が多い。

鬼は嘘を吐く事をこの上ない恥だと言う。鬼も極端な性格の持ち主が多く、ある意味『ずれている』のだ。

「私は先頭でも構わない。むしろ、化け物を一番早く目に掛けられる点では一番良い立ち位置じゃないか」

「では、私は二番目にしよう。勇儀殿の援護を受け持つ」

「じゃあ私は一番後ろで。背後の奇襲は私が撃退するよ」

「……私は中央辺りで見張りでもするわよ……」

ため息交じりに呟く華扇だったが、鍵を見つけないと出られないとは分かっている。そのため、一刻も早くここから出るためには、ある程度積極的に協力する他なかった。

四人は自己申請した順に列を組み、音のした方へ向かう。

「流石洋館だ。異国語の札が付いているぞ」

廊下に面する一つの扉に『LIBRARY』と書かれた札が付いていた。

「コンガラ、読めるのかい？」

札をまじまじと見つめながら萃香が尋ねる。

「そのような訳わけなからう。異国語など、模様のようにしか見えぬ」  
「まあ、そうだよねえ」

山に住む鬼や仏が外国語に触れる機会は少なく、自分から触れようとする意欲がある個体も稀である。自分らの使っている言葉や文字で全て事足りるのだから、他の言語を学ぶ必要など無いのだ。

「お二人さん、ちいと頼りないんじゃないかい？」

勇儀が二人を嘲あざけるように介入した。自信に満ちた目でコンガラと萃香を交互に見る。

「英語って言うのさ。洋風志向の奴の近くにたまにある」

「勇儀殿、読めるのか」

「へえ、この中で情報量が一番乏しいのはあんただと思ってたよ。案外広い情報網を持つているのかねえ」

二人は意外そうに言った。

力の勇儀。彼女は一部でそう呼ばれていた。脳筋という言葉があるように、力のある者は知性が乏しいように見えやすい。勇儀自身も、知的なそぶりを見せた事はなかった。

「で、この言葉はなんて意味なんだい？」

「知るか。どんな部屋かなんて、入ってみりや分かる事さ」

「結局知らないのね」

あの自信に満ちた目は、異国語が読める事による物ではなく、なんという種類の文字か知っている事による物であった。

知的なそぶりはしないのではなく、できない。

「別にいいだろう、文字だけが情報って訳じゃあない。何か割れた音源だって、ここかもしれないだろう。よし入るか」

鍵は開いていた。

勇儀が先頭となり、部屋へと入る。比較的広い室内には、勇儀の身長の二倍ほどある本棚がいくつも置かれていた。

「図書室ね……」

華扇が本棚へ近づき、いくつかの本を手にとってはパラパラとめくる。本を棚に戻すと、今度は全ての本棚を眺めるようにして部屋を周った。

「……駄目ね。ここの本、全部異国語で書かれてる。ここで情報は得られないわ」

「いや、情報は無くとも、何か手掛かりはあるかもしれないよ。一通り探してみようじゃないか」

本に何か挟まっていないか、本棚の下に何かないか、全てを確かめるとするとかかなり時間にかかるであろう作業だった。

作業効率を上げようと、萃香は複数人に分裂してまで搜索を始めた。

しかし、手掛かりは、簡単な場所で見つかる。

「見つかったわよ」

華扇が見ているのは、図書室内の書類がいくつか置いてあった机だ。その声を聞いて、一つに萃<sup>あつ</sup>まった萃香と、本棚を切り刻もうとしていたコンガラ、本棚を破壊した勇儀が机に近づく。

「なーんだ、気張る事も無かったね」

「ねえ勇儀。なんで本棚壊したのよ」

「これは……寝室の鍵か」

鍵は書類の下に、無造作な状態で置かれていた。鍵には、二つの札がついていた。片方は日本語で『寝室』と書かれている。もう片方の札は英語で記されている。

「一応、この本棚はあなたの物じゃないんだから、勝手に壊したら——」

「寝室は何処<sup>どこ</sup>にあるんだろうね」

「手当たり次第に探すしかないようだ」

「そもそも、あなたは考えてから行動するっていう事を——」

「だが、何か割れた場所も探さなければ……」

「どっちを優先しようかねえ……」

「力で解決することが一番合理的とは限らないのよ？ だから、物事の解決方法には——」

「華扇、静かに」

「えっ」

萃香に説教を止められたり、コンガラに真顔でからかわれたり、こ

の短時間で何度も散々な目に遭っている彼女は、少しでも幸せなひと時を過ごしたい気持ちに駆られた。お団子や羊羹を食べたいと。

「よし！ とりあえず、音のした所を探そうか。運よく寝室に当たったらそこを調べよう」

異論を唱える者はいない。

「じゃあ、行くか」

皆が場を離れようとして間もなく、室内の雰囲気が変わった。何処か不穏な空気だった。

四人はそれに敏感に反応し、すぐに辺りを見回す。

「あれは……何だ……？」

『それ』は本棚の後ろから突如現れた、先ほどまでは何も無かったというのに。

背丈は本棚ほどあり、一応人型を取っているが頭は異常に大きく、体も青黒い色をし、目の形は左右非対称、見るからに『化け物』だった。

「はあ……コンガラの言う事は当たってたのね」

「ほう、なかなか面白くなってきたではないか」

「酒があるって噂の信憑性も高くなったよ」

「ああ。でも、とりあえずは戦うのが先になるかもしれないね……」  
青黒い怪物は四人を発見すると、少しの間だけ静止した。獲物の状態を確認しているかのようだった。

「あんた……話せたりできるのかい？」

勇儀の問いに返って来る言葉は無し。依然と唸り声が聞こえるだけだ。

「ああそうかい、無理かい。……みんな、構えた方が良さそうだ。来る」

次の瞬間、怪物は四人へ襲い掛かった。

「ねえ文。なんでまた逃げたのよ」

館には鴉天狗が二人生存していた。

「戦う意味が無いからよ。良い写真と情報が手に入ればこの館にだって用済み、すぐに出ればいい」

「出られないから困ってるんでしょ」

文と呼ばれた者は、首にカメラをぶら下げている。名を射命丸文しゃめいまるあやと  
いった。

もう片方の者は、手に携帯電話のようなカメラを待っている。名を  
姫海棠ひめかいどうはたてと叫ぶ。

双方は新聞記者であり、別の新聞を作成している。今は、現在最も  
話題になっていている神隠しの館の実態を写真に収めるために館へ訪れ  
ていた。

「って言うか、なんで私も連れて来たの？ 私は念写を使えば簡単に  
写真が手に入るのに。あの怪物の写真だって、潜入せずとも一発入  
手」

彼女は、念写という、単語を思い浮かべれば、それに関する画像が  
撮れるという優れた能力を持っていた。その為、外出頻度が少ない傾  
向にある。

「自分から出向かなければ分からない事だつて沢山あると言うのに。  
それだからいつまで経つても花果子かかしねんぼう念報は弱小新聞なのよ」

「あんたは行動力以前に、記事をすっかりしなきゃ。そんなに雑な記  
事の前には、大きな真実も廃れてしまうわ」

「何を言ってるの？ 大きな真実は廃れない物よ。そのの大きさを示  
すために文字がある。文字数が多いほど重要だつて事は、誰もが感覚  
的に察知するわ」

「あと、どうせあれでしょ。私が念写を使わないように、道連れする気  
でしょ。もし一人でここへ来て万が一何かがあれば、新聞を作れず、  
私に先を越されるからね」

「半分正解、半分不正解。道連れにするっていうのはその通りだけど、  
あなたが何をしても、私の新聞を越す事はできない」

「何を！ ふんっ、どうかしらね。今に見ている」

そう言つて、はたては文にカメラを突き付けた。

「館の正体を暴く決定的な写真を撮つてやるわよ。あなたに勝るステータスでね」

「やってみたら？ 不人気度だけを示すそのステータスで、何ができるのか知らないけど」

彼女達は睨み合っている。いかにも、火花が散りそうなくらいだ。

しかしその時、場の雰囲気が大きく変わると共に、扉の方から唸り声が聞こえた。この唸り声は、この館において、ある事を示している。「……見つけた」

二人は声を合わせた。